

山本レポート(巻頭言)

トランプ大統領に悪意があるのかはわからないが、一般に、米国は瀬戸物屋に入ったゾウさんといわれている。大きくて悪気もないが、動くたびにものを壊してしまうからだそうだ。

日本は大きな瀬戸物店のようなもので、開国以来、いや開国以前から犠牲になってきている。そもそも、ペリーが日本に 1853 年に浦賀にやってきて、幕末が始まった。当初 4 隻で、測量にきたただけであった。理由は、欧州大陸での産業革命が始まり、米国产の綿糸の重要が急拡大。米国南部の綿花畑で黒人を使い増産で応じたが、間に合わず鯨油の蝋燭で夜なべをさせた。そこで登場したのが P&G でいまだに名門企業だが、発端は石鹼製造屋と蝋燭屋のプロクターさんとギャンブルさんが作った企業だ。蝋燭は鯨油でできていた。そして、クジラの豊富な太平洋に米国の捕鯨船が出動したのだ。

ジョン万次郎が乗った漁船が難破して彼を助けたのも米国の捕鯨船だ。そんな捕鯨船にも水や薪炭供給が必要で鎖国中の日本にペリーはお願いにきただけだったのだ。どこでもよかった。その証拠に沖縄にもペリーは寄港している。しかし、早とちりの日本は、開国鎖国、勤皇佐幕で大騒動となり、明治維新を迎えることになる。

今回のトランプ関税もオーバーリアクションと交渉不慣れで大騒ぎとなった。1941 年にもハルノートを突き付けられ、ある意味、無用で勝ち目のない戦争に突入してしまった。時の為政者の胆力のなさが、敗因かもしれない。

いまだに人気者の JF ケネディーも日本に強烈なパンチ食らわせている。1963 年の「利子平衡税」だ。「利子平衡税」とは、今回のトランプ関税と同様に、国際収支改善策として導入された税制で、米投資家がうまみのある外国証券に投資することを抑えるために導入された税制ということになる。

お笑いなのは、トランプ関税と違い発表当日は何のこと理解できず東京市場は平静であったそうだ。2 日後大変な話だと理解し今度は過剰反応したとのこと。時の田中角栄蔵相は野村証券に連絡を取り、当時の北裏副社長にご進講を求めたそうだ。もちろん伝聞なので虚実は不明だが、政府として当然の対応だろう。そこで後に野村総合研究所のトップになるような証券アナリストを引き連れて御説明に上がったそうだ。飲み込みの早い田中角栄のこと「わかった」と膝を叩き、そして別れ際「ところで、その場合どの銘柄がいいんだ」とご下問されたそうだ。真偽不明だが、ありそうなのはなしだ。

善悪は置くとして、そんなエネルギーは現在の政治家には見られない。証券市場は想像力とエネルギーがぶつかる前線のようなものだ。株式市場は永遠に続く。現在の株高も近々合理的説明がつくことであろう。Never Give-up で向かい合うことが肝要だ。

8月19日記

以上